

起コスーなどいふ人間の弱點をあらはして居る言葉の盛んに用ゐられる我が國民では、支那人と違ふて、「ナンノ世ノ中ハコレガアタリマヘダ」的言葉の下に、却つて獎勵するとも決して此の「輕口」「饒舌等」を矯正する事は出来ないといふ事が容易に割り出される。かつや又、まだ世の中といふものを知らぬ、自然のまゝの兒童に問はれて答へようとする、甚だ説明に苦しむので、或は潔白な兒童の心裡に、汚れをどいめる様な事になる、これでも此の諺が、神聖なる戒めでない、又戒めとして甚だ不合理なものであると言ふ事が知れるであらう。

そこで今此處に、「口は幸ひの基」といつたけれど、かういつては決して戒めにもならなければ、諺といふものでもない。然し此の「口は禍の基」

といふ消極的な戒めの存する限りは、不合理な諺のある間は、吾人は一方に、積極的な教訓、合理的な確言としてこれを特に記憶する必要があると信するのである。



寄書

食はず嫌ひ

長野 飯島 八千溪

食物の好き嫌いわ、全く、我儘から來るので、一年三百六十五日、此位親に迷惑を掛け、心配させる事わありません。

そこで、私の生れ在所わ、信州の伊那で、田麥の澤山とれる所で、米と麥どが、平生の食物にな

つて居りますから、皆、身軀が丈夫でゐいます。
所が、私の四五軒隣りに、おまさと云ふ娘がゐ
まして、其娘わ、どーも、食物に好き嫌いが有つ
て、特に、麥と來たら、一所に煮た御飯の香いも
いやだと云ふので、おッ母さんが色々心配なさ
るが、どーしても其娘だけは、別飯でなければ食
ぬので、其おッ母さんのお骨折りと、御心配とは、
どんなでゐいましょう。

其うちに其娘が、脚氣と胃病とに罹つて、床に
就いてしまいました。サー、そーなると、お父さ
んやおッ母さんの御心配わ、今迄と違つて、一層
甚だしく、晝夜そばに居て、揉んだり、摩たりし
て居る(何と有がたいことではゐいせんか)が段
々、重くなるから、お醫者さんと呼んで見て頂い
たら、之わ、お麥の御飯と、赤小豆とを食べなく

てわいかんどのとでゐいましたが、何に致せ、お
麥わ、香いもいやだと云ふので困つて居ました。

そーすると、其翌日、お隣の叔母さんが、お見
舞に來て其話を聞き、夫れなら、此隣村に、よい
行者さんが有るから、其行者さんを頼んで拜んで
貰つたらと云ふので、直、其行者を頼んで拜んで
貰いました。所が、其晩から何の苦なしに食べら
れるよーになつて、忽ち病氣が直つてしまいました。
た。

後に其娘に、あの位嫌いで有つた、麥飯が、な
ぜあのよーに苦なしに食べられるよーになつたか
ど、尋ねましたら、神様の云ふ事を聞かぬと、罰
があたると思つて食たら、少しも、いやでなく食
べられたと云いました。如斯を食わず嫌いと云ふ
ので、之わ、甚だ我儘な、よくないとでゐいます。